

仙台 政宗の夢

— 城とまちづくりを探る —

◎平成13年6月2日(土)
◎仙台市民会館小ホール



「明治元年現状仙台城市之図」(部分) 仙台市博物館蔵 (1868年)



金箔押菊丸瓦 (仙台北丸跡出土)



青花金彩鳳凰文谷子片 (仙台北丸跡出土)

仙台城本丸跡の発掘調査

金森安孝 (仙台市教育委員会)

仙台城は、伊達政宗が仙台市街地の西部、青葉山の丘陵上に、城域を囲むように流れる広瀬川や、その支沢や断崖などの自然地形を巧みに利用し、大手となる尾根筋を主とする部分に石垣を築いた山城である。

政宗は、東北における関ヶ原戦となる、対上杉戦の前線基地であった北目城(仙台市太白区)で臨戦態勢をとりながら、慶長5年(1600)12月に仙台城の縄張を開始し、部分的に石垣を配しながら短期間で普請(土木工事)を完了している。

近年、仙台城本丸跡の北面石垣の変形が目立ちはじめ、仙台市は平成9年(1997)から、青葉山公園整備計画の一環として石垣の解体修復工事に着手している。それに伴い、仙台市教育委員会は、工事と並行する発掘調査を実施し、現存石垣内部から、政宗による築城期石垣や大量の遺物を発見した。

発見した旧石垣は、その重複関係と石垣構造、文献調査などから、慶長年間のⅠ期石垣と、元和2年(1616)地震後に修復されたⅡ期石垣に分けられ、正保3年(1646)と寛文8年(1668)の地震を経て、四代藩主綱村治世期に構築された現存石垣(Ⅲ期)となる。Ⅰ期は旧地形に沿って折れ曲がり、絵図に描かれない縄張の石垣で、Ⅱ期は現存する最古の絵図である「奥州仙台城絵図」〔齋藤報恩会蔵正保2~3年(1645~1646)作製〕のプランとなり、Ⅲ期の現存石垣へと変遷する。

本丸の平場からは、書院跡と推定される掘立柱建物跡や、茶室にかかわる手水処(手口を清める場所)と推定される石敷遺構や池を伴う庭園の一面、御成門付近の礎石群、井戸跡などを発見しており、出土した金箔瓦やヨーロッパ産ガラス器、中国産高級磁器、蒔絵や木簡などの多彩な遺物とともに、石垣の構築年代や本丸建物群の性格を検討していく上で重要な調査成果となっている。

また、伊達氏入府以前、国分氏の居城千代城の出入り口にあたる石敷きの虎口や、塹堀、通路部分などを検出しており、仙台城が文献に記されたとおり、中世山城を再利用、修復したもので、短期間で築城できた大きな理由であろう。

本丸は「東西百三十五間(265.95m)、南北百四十七間(289.59m)」もの規模(1間=6尺5寸、1.96mで換算)であり、約二万坪にも及ぶ広大な平場を青葉山の山上部に造成し、桃山建築の粋を集めた「本丸御殿」が、城下町から仰ぎ見る姿で存在していたことになる。こうした仙台藩の土木技術は、戦国時代以降、各地の城館の築城・城下町普請に培われた、伊達氏家臣団の技術水準の高さを明瞭に示すものである。

築城期の仙台城は、本丸と三の丸を結ぶ動線を中心とする曲輪から構成されていた可能性が高い。二の丸は、政宗死去後、寛永年間以降の造営であり、本丸や政宗晩年の屋敷地「若林城」の建物を解体移築し、本丸の配置に倣ったものとみられる。政宗が元和年間頃に茶室や庭園として利用した「三の丸」の地は、米蔵へとその曲輪の性格が変貌する。二の丸の大手脇には登米・水沢の伊達一門の屋敷地を配し、広瀬川にかかる大橋の袂には武勇で名を馳せた片倉家を備え、城の正面の守りを固めている。かくして、仙台城は、政宗の城から忠宗の城へと大きく姿を変えてはいるが、幕末を経て、現在までその縄張りがほぼ保たれているものとみられる。

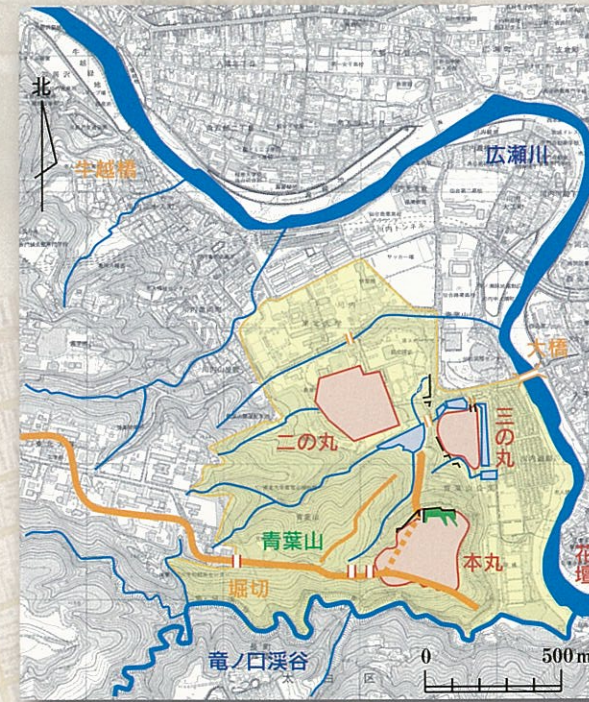


図1 仙台城跡と自然地形 仙台城の範囲

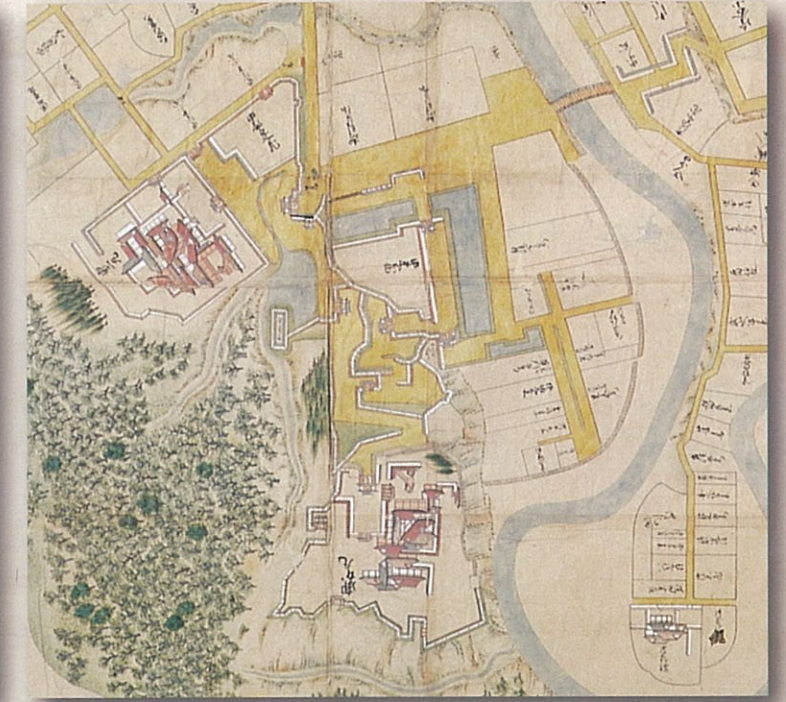


図2 「仙台城下絵図」(部分)宮城県図書館蔵 推定 寛文4年(1664)

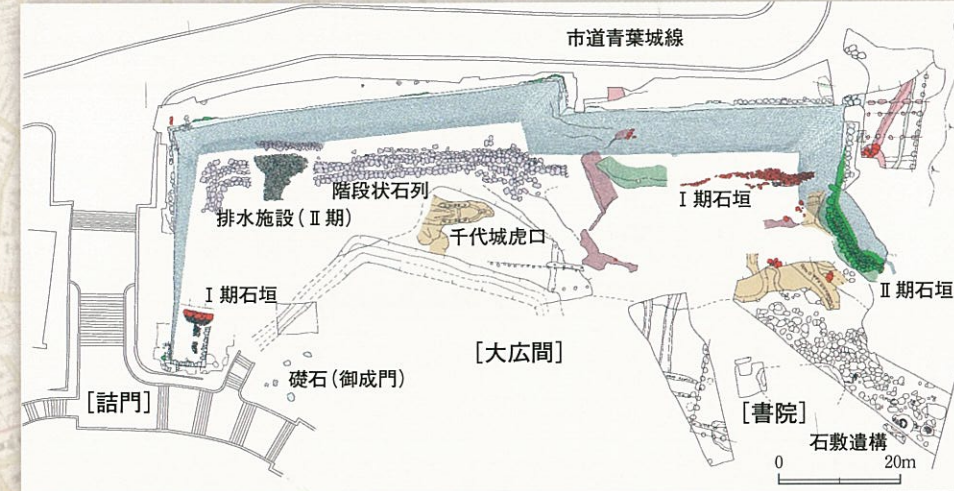


図3 仙台城本丸跡遺構配置図



写真1 仙台城本丸跡北東部(2000年11月撮影)

仙台城は、青葉山の山上に築かれた天然の要害である。広瀬川とその支流の竜ノ口溪谷や、支沢を巧みに利用し、山上の本丸を中心に築かれた山城で、東北大学(青葉山キャンパス)から延びる尾根上には、敵の侵入を防ぐための堀切が設けられている。山麓の三の丸は水堀と土塁に囲まれ、防御を固めている。

「仙台城下絵図」(図2)には、本丸と二の丸の建物群が描かれ、往時の姿を読み取ることができる。広瀬川対岸の花壇にも「假屋」の御殿が描かれていることにも注目したい。

本丸跡の北面石垣の解体工事に伴う発掘調査で、現存石垣(Ⅲ期)の背面から、伊達政宗の治世期に築かれた築城期石垣(Ⅰ期)と、地震後に修復されたⅡ期石垣を発見し、三時期にわたる石垣変遷とその背面構造が判明した。

近世都市仙台の成立—双核都市から一核都市へ—

千葉正樹

近世初頭は日本の都市史上の画期であった。近世城下町という新しい都市形態が成立し、その多くは現在にいたるまで各地の中心都市として存続している。関ヶ原の戦いを終えた直後、慶長6年(1601)に建設の始まる仙台もまた、近世社会が生んだ城下町である。広瀬川西岸に城をおき、西岸を内郭部、東岸を外郭部としていること、武士・町人・足軽などの身分別に空間が編成されたこと、主要幹線＝奥州街道が外郭を南北に走り、内郭を貫かないこと、その沿道に町人地が集中していること、最外郭部に足軽屋敷と寺社が置かれていることなど、最初に生まれた仙台はほぼ近世城下町のモデル通りとっていい相貌を見せていた。

しかし、当時、仙台にあった都市域はそれだけではない。初期仙台の南郊には、南西～北東方向に走る微高地上に古代以来の交通幹線である東海道が機能しており、その沿道には北目や南小泉の都市的な場が生きていた。南小泉にあった国分氏に関する町が初期仙台の中心部に移され、国分町・二日町になったことは確実だが、最近の発掘調査によって、南小泉にも依然、都市型の集落が存続していたことが明らかになった。近世中期までは北目に都市域が存続し続けたことも史料からうかがえる。

慶長7年に仙台城に入城した政宗であったが、本丸一郭の山城に住まうということは治世上不便が多かったのだろうか、城下の屋敷を泊まり歩くことも多く、特に花壇の屋敷が政務の場として機能した。やがて寛永4年(1627)、元和一国一城令に伴い「屋敷」として許可を受け、南小泉の旧国分氏拠点を改変するかたちで若林城の造営を開始する。翌年には若林城に入城、これ以後、政宗は在国中、饗応その他の催しの折りに仙台城を訪れる外は、若林城に起臥した。周囲には一門以下が屋敷を連ね、米町・絹布町などの町屋敷が設置され、若林町奉行も任じられる。すなわち若林城下は実質的に独立城下町として機能した。一方、初期仙台の中心部にあった荒町が現在地へ移動し、その一帯を仙台・若林両城下が共有するかたちとなったことにより、古代以来の都市域と近世の建設になる新都市域がはじめて一体化する。とはいえこの時期の都市形態は、仙台城と若林城という二つの都市核を持つ特異な状態であった。

寛永13年(1636)、政宗は死去、襲封した二代忠宗によって若林城は二の丸に吸収されるかたちで廃城となった。仙台城は本丸の他、二の丸以下の曲輪を備える近世城郭の形態を整える。仙台の開発は周囲に広がる湿地や深田の乾地化が絶対条件であり、特に若林城下の武家屋敷の代地として選ばれた市街地東北部では梅田川の水量コントロールに鍵があった。光明寺堤はそのために設置されたものと考えられ、その完成により、北部丘陵地の山際いっぱいまで乾地化する。背景には川村孫兵衛に代表される土木技術者の召し抱えがあり、また江戸の天下普請で藩に蓄積された技術があったと考えられる。こうして忠宗代の都市建設によって、城下町の大枠が決定し(「仙台二十四町」中22町まで成立)、仙台は双核都市の状態を脱して、ひとつの核に再編成され、近世都市として完成したといえる。



図1「仙台下絵図」仙台市博物館蔵
推定 天明6～寛政元年(1786～1789)
廃墟となった若林城が描かれているなど、完成した近世城下町仙台の全体状況を見るのに適している。とはいえ天明飢饉の打撃は市内に及び、北部、東部には空き家となった武家屋敷が連なっていた。

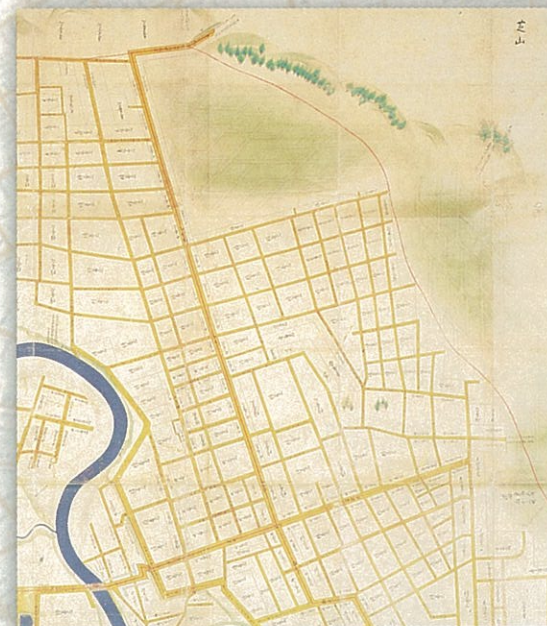


図2「奥州仙台城絵図」(部分) 齋藤報恩会蔵
推定 正保2～3年(1645～1646)
当初、城下町の鬼門(東北方向)を鎮護していたと考えられる勾当台寺院群の北にも武家屋敷が展開し始めたが、北四番丁の線が限界となっている。



図3「仙台下絵図」(部分) 宮城県図書館蔵
推定 寛文4年(1664)
図2の段階と比較して光明寺堤の水面が拡張し、堤北側に足軽町(堤町)が移設、武家屋敷の線は北六番丁まで北上した。現在の堤通りのラインが絵図中にうっすらと記されている。東北端には東照宮が造営され、ここから南を見通すかたちで宮町が町割された。

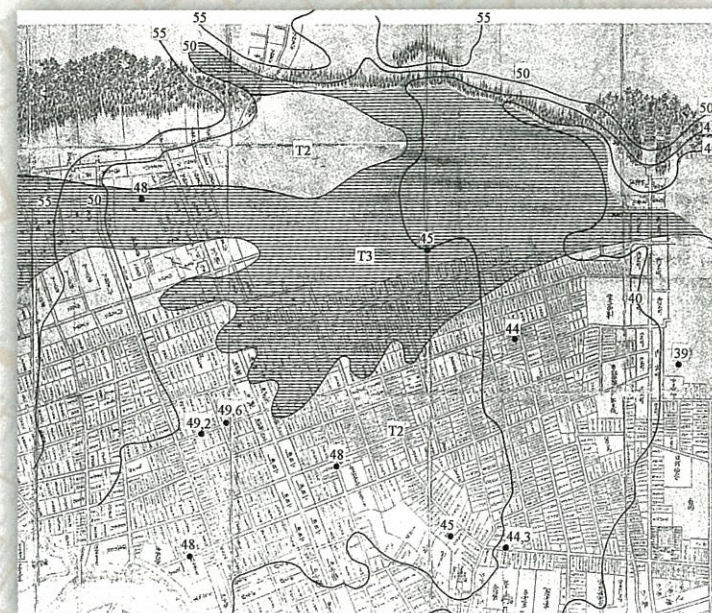


図4 寛文図に等高線と「仙台地域の地質」(地質調査所 1986)の段丘面を書き加えた。T2は上町段丘面、T3は中町段丘面を示す。

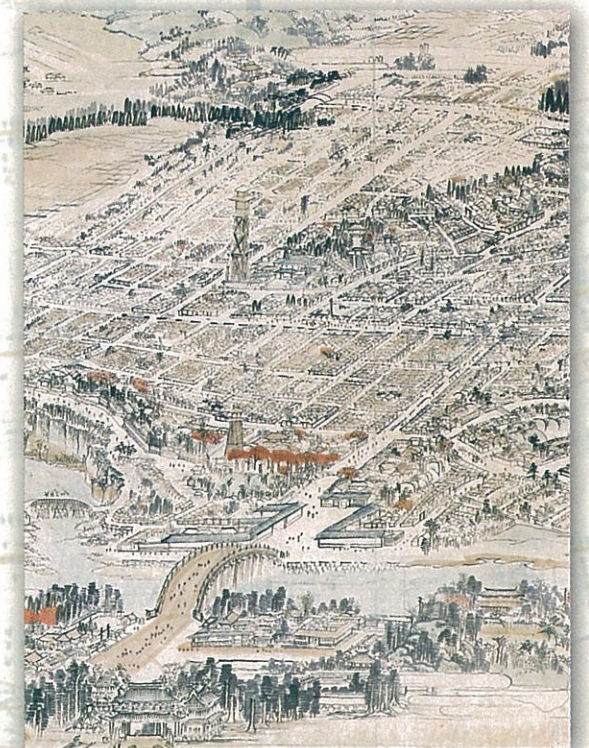


図5「明治元年現状仙台城市之図」(部分) 仙台市博物館蔵(1868)

日本の城・世界の城と仙台城

千田 嘉博

仙台城は日本の近世城郭を代表する城である。今日、遺跡として残された仙台城跡をどのように活用していくべきかについて議論が重ねられ、また具体的な整備に向けて基礎的な調査や修理が進んでいる。城跡の歴史的空間を再生することは、市民に、より文化的で優れた住環境を提供し、城下町仙台の個性を顕在化することである。しかし、ともすればこうした城跡の整備では天守や門など建物に注目が集まりやすい。たしかに天守や櫓などはもともと象徴性を強くもった施設であり、城のイメージと直結することは不思議ではない。

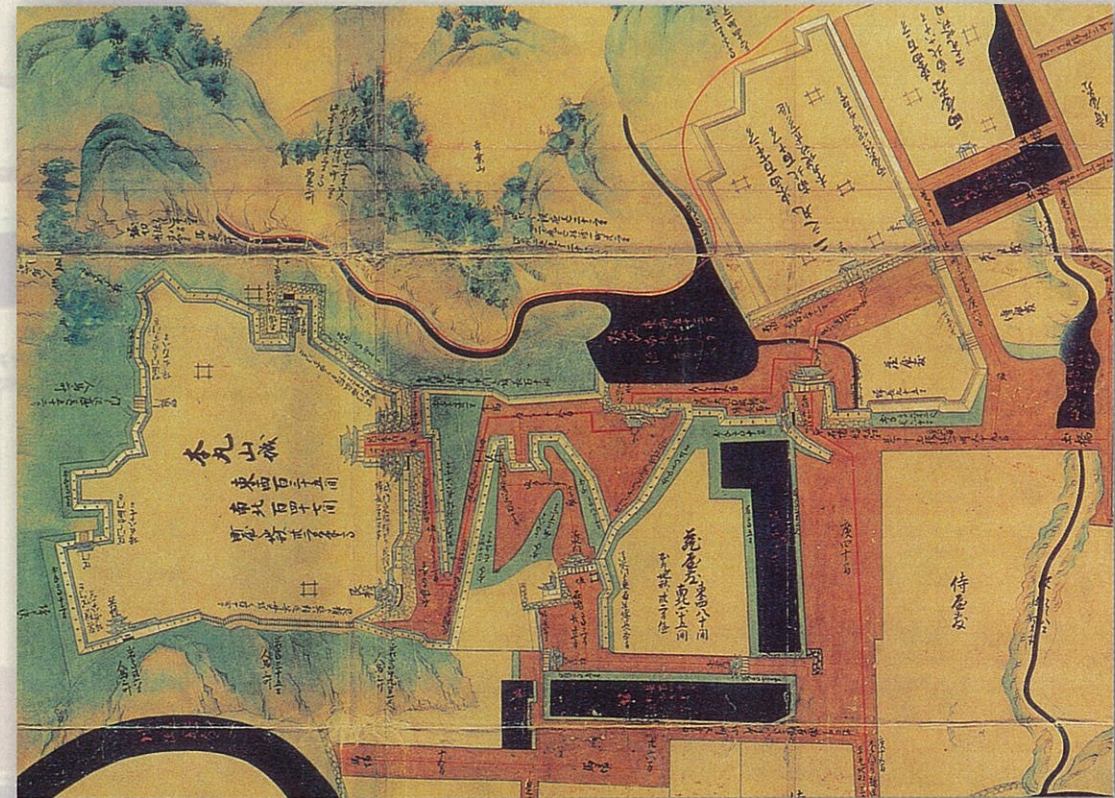
ただし城は天守や門といった建物だけでできていたのではなく、堀や土塁・石垣といった土木工事からできた部分によっても成り立っていた。環境によってさまざまなバリエーションをもち得た建物に対して、土木工事によってできあがった部分のかたちは人類史的な共通性や普遍性が高く、城から世界の歴史を考えるよい手がかりになる。そして城跡の整備を進めるにも、こうした土塁や堀・石垣などの組み合わせでできた部分をどう理解するかを見落としてはいけない。

仙台城のかたちはひじょうに複雑で難解である。しかし二の丸が当初からあったのではなく、遅れて成立したことがわかれば理解しやすい。つまり仙台城は山城の中心部に大名自らが住むという戦国期拠点城郭を基本とし、山麓に向けて外柵形による虎口空間を重ねた織田信長や豊臣秀吉の城づくり「織豊系城郭」の系譜に属した城であったと評価できる。さらに本丸内に行幸の施設を備え、金箔瓦の装飾を施すなど、まさに天下人の居城としての格式をもった城といえよう。

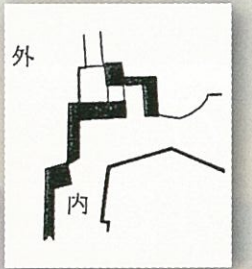
仙台城の出入り口に見られる外柵形とは、出入り口に鍵の手形の石塁や土塁を築き、わざと城道を屈曲させることで防御力と出撃性を高めたものであった。織田信長が取り入れ、豊臣秀吉もそれを受け継いで出入り口の基本形にしたことで、江戸時代の城の出入り口の基準のひとつになった。

外柵形はこれまで日本の近世城郭を特色づけるくふうをした出入り口のかたちと評価されてきたが、実は世界各国の城を調べてみると、世界のいろいろな地域と時代に使っていた出入り口のかたちであったことがわかる。ヨーロッパでは防御都市の歴史は紀元前4000年に遡る。最初の防御都市であったギリシャのディミニ遺跡は囲郭をめぐらすが出入り口は単純であった。しかし紀元前3000年のギリシャのシロス・カストリニ遺跡では初源的な外柵形が出現し、紀元前5・600年頃の地中海地方のヘレニズム期の城郭では、日本の戦国時代とまったく同じ外柵形の出入り口が多数あった。

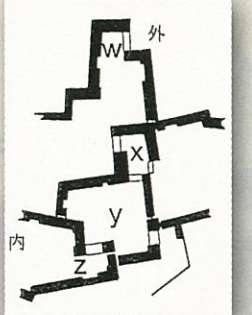
これらは一例だが、外柵形という出入り口のかたちは人類が城の高度な出入り口を求めたとき、たどり着いた最適な姿のひとつだったのである。世界史的な実年代では日本での外柵形の発見は早くない。しかし中世の短期間に高度な出入り口を生み出したことは、大きな特色といえる。このように仙台城は堀と石垣、木造の建物を高度に組み合わせて特筆すべき城郭を構成したが、実はそこには特別さとともに、人類と城の世界史につながる共通性も兼ね備えたのである。



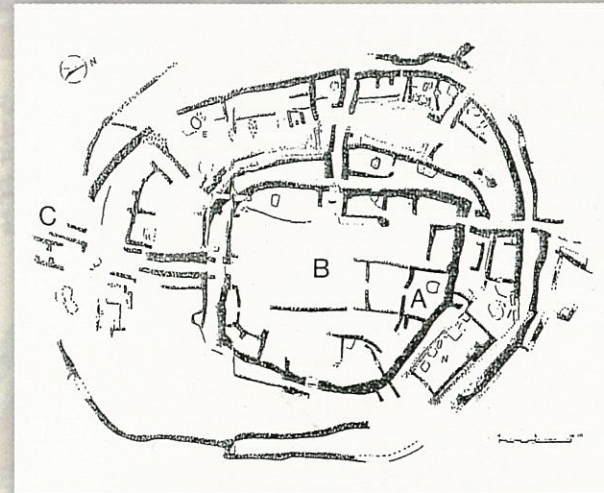
「奥州仙台城絵図」(部分) 斎藤報恩会蔵 推定 正保2~3年(1645~1646)



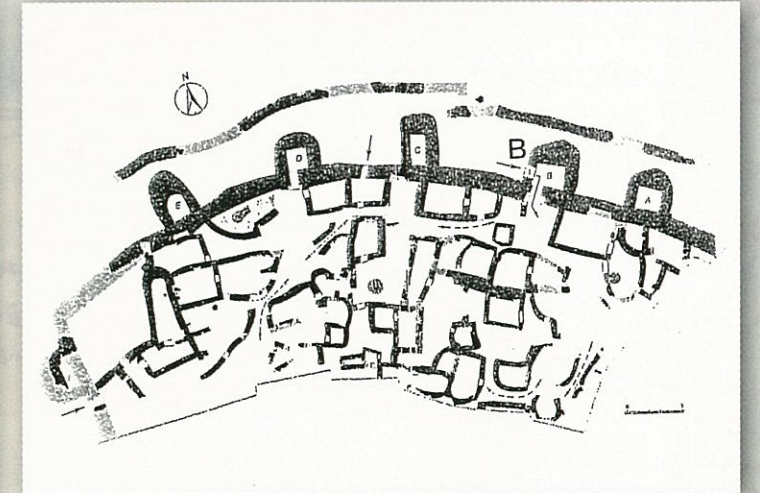
安土城黒鉄門 (日本・16世紀後半)



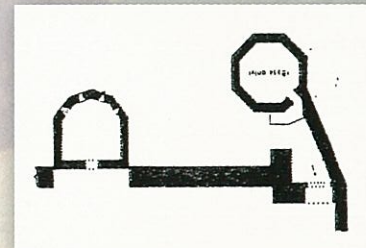
倭城熊川城北門 (韓国・16世紀後半)



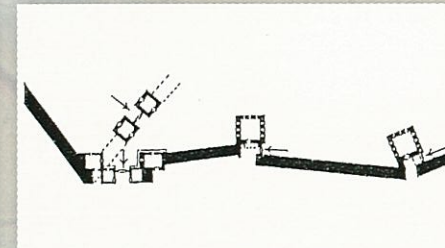
ディミニ(ギリシャ)



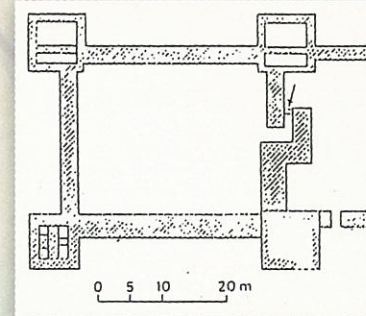
シロス・カストリニ(ギリシャ)



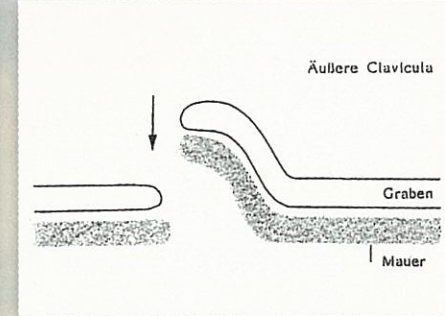
イサウラ(トルコ)



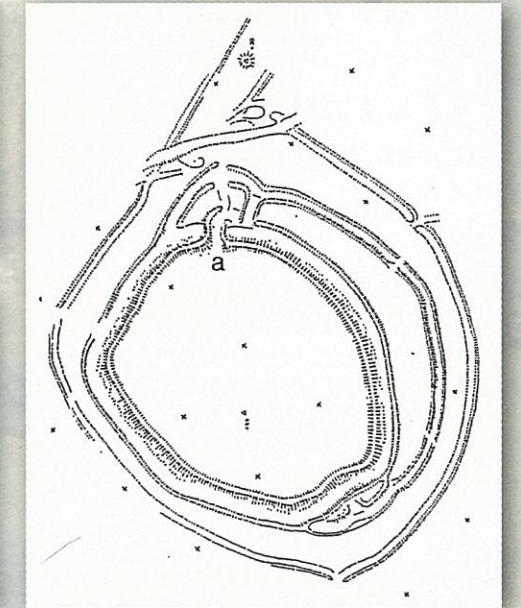
ミレトウス(トルコ)



ジャンギラ(トルコ)



ローマ軍キャンプの外柵形(概念図)



deenberi(イギリス)

仙台城と城下町の基礎知識

Q 仙台城はどんな城？

A 伊達政宗が、慶長5年(1600)から青葉山の山上に築いた城で、現在、「天守台」と呼ばれる本丸の規模は江戸城本丸に匹敵する程大きく、戦国時代末期としてはめずらしい「山城」でした。二の丸は、寛永13年(1636)に政宗が死去した後、二代藩主忠宗が東北大学キャンパスのあたりの一段低い段丘上に造営した曲輪(くるわ)です。三の丸の地は、当初は茶室や庭園をもつ屋敷地として、後に米蔵に変わり、現在は博物館として利用されています。

Q 仙台の名前はどのようにつけられたの？

A 伊達氏入府以前、青葉山にこの地を治めていた国分氏の居城「千代城」がありました。この跡地を居城に選んだ政宗が、唐の漢詩から「仙臺(台)」の文字を選び、慶長5年(1600)12月、新しい居城と城下町の名前としたものです。

Q 青葉城に上ってみても、政宗の騎馬像しかないのに、どうしてお城ってわかるの？

A 城は建物だけを指すものではありません。まず、自然の地形を選び、縄張(なわばり)という基本設計(ランドプラン)を決めます。次に、普請(ふしん)と呼ばれる土木工事で、尾根を削り、土砂で谷を埋めて、郭や丸、曲輪とよばれる平場を造成し、土塁や石垣、堀で周縁部を囲みます。最後に作事(さくじ)とよばれる建築工事で、櫓や門を築いていきます。仙台城には、大阪城や姫路城に残っているような建物は戦災や破城(城を壊すこと、破却ともいう)で残っていませんが、石垣や土塁、堀など、往時を偲ぶ遺構(いこう)が随所に見られます。

Q 仙台の城下町の範囲はどこまで？

A 城下町の建設は、まず、東西の基準となる大町の町並みと、南北の奥州街道を決め、その交差点を基点(後の「芭蕉の辻」とした後、碁盤の目状の区画を造っていったと考えられています。城下の範囲は、おおむね広瀬川と梅田川、現在のJR東北本線の貨物線に囲まれる範囲で、「仙台輪中」といわれていました。寛永年間の政宗による若林城(現、宮城刑務所)の築城を契機に城下の範囲は南東に拡大し、小城下町を形成しました。その後、忠宗の東照宮の造営などで宮町や鉄砲町など、北東に拡大していきます。現在でも、鉤型に曲がる「枡形」とよばれる道路の屈曲や町名に昔の面影を偲ぶことができます。

Q 武家屋敷と町屋敷のちがいは？

A 城下町では侍と町人の住む場所が分けられており、かつては、侍屋敷のある「丁」と、町人や職人の住む「町」で、容易に区別できました。たとえば、片平丁は、川に面して原田甲斐など大身の武士が住み、大名小路とも呼ばれていました。荒町は、米沢市の桐町(あらまち)、岩出山町の新町と、政宗とともに移住した御用商人の町である「御譜代町」六町の一つで、開府当時は南町の西裏(本荒町)にありましたが、寛永年間に現在地に移されて、麴の専売特権を与えられ、奥州街道沿いの商人町として栄えました。

仙台城・城下町関連年表

西暦	年号	月日	仙台藩関連			全国の主な出来事		
			主な出来事	藩主	伊達氏の居城			
1591	天正19年	9月23日	伊達政宗、米沢から岩手沢(岩出山)城に移る	初代政宗	岩出山城	1590 小田原城落城、豊臣秀吉全国統一成る 1592 秀吉、諸大名に朝鮮出兵を発令す		
1600	慶長5年	8月22日	徳川家康、政宗に寛書を与える(百万石の御墨付)		仙台城(本丸時代)	「花壇御假屋」・「三の丸」	1598 秀吉、死去	
		12月24日	政宗、千代を仙台と改め、城普請の縄張を開始				1600 関ヶ原の戦	
1601	慶長6年	1月11日	政宗、仙台城普請を開始					
		4月14日	政宗、仙台城に入る					
1603	慶長8年	8月	仙台城ほぼ完成、政宗、岩出山より移る					1603 家康、征夷大将軍となり江戸幕府を開く
1607	慶長12年	8月・10月	大崎八幡宮・陸奥国分寺薬師堂の造営なる					
1610	慶長15年	5月4日	仙台城大広間完成					
1611	慶長16年	10月	政宗、ソテロとビスカイノに仙台城で謁見					1612 家康、キリスト教をを禁止
1613	慶長18年	9月15日	政宗、支倉常長をローマに派遣					1614 大阪冬の陣
1616	元和2年	7月28日	地震により櫓・城壁崩壊する					1616 家康、死去
1620	元和6年	8月26日	支倉常長、帰朝					
1627	寛永4年	11月16日	政宗、若林屋敷の経営許さる(翌年11月完成)				二代忠宗	若林城
1636	寛永13年	5月24日	政宗、江戸桜田邸で死去、忠宗二代藩主となる	1635 参勤交代制の確立				
1637	寛永14年	10月24日	瑞鳳殿の造営完成					
1638	寛永15年	7月16日	幕府、仙台城二の丸造営を許可(翌年6月25日完成) ※『奥州仙台城絵図』(1645・46)		1644 幕府、諸大名に国絵図作成を命ず			
1646	正保3年	4月26日	地震により本丸城壁崩壊、櫓悉く倒壊す					
1649	慶安2年	5月28日	東照宮の造営に着手					
1658	万治元年	7月12日	忠宗、死去	三代綱宗	仙台城(二の丸時代)	1657 江戸明暦の大火		
1660	万治3年	9月3日	綱宗、隠居 ※『仙台城下絵図』(1664)					
1668	寛文8年	7月21日	大地震、城壁崩れる	四代綱村	仙台城(二の丸時代)			
1671	寛文11年	3月27日	伊達騒動起こる ※『仙台城下大絵図』(1678~80) ※『奥州仙台城井城下絵図』(1682) ※『青山公造制城郭写之略図』					
1688	元禄元年		元禄年間の二の丸改造(1700年頃まで)					
1703	元禄16年	8月25日	綱村、隠居	五代吉村	仙台城(二の丸時代)			
1708	宝永5年	2月9日	仙台城下に大火、焼失家屋2135戸					
1727	享保12年	3月16日	仙台城下に大火、焼失家屋1525戸	九代周宗	仙台城(二の丸時代)	1783~88 天明の大飢饉		
1752	宝暦2年	2月6日	仙台城下に大火、焼失家屋1527戸					
1776	安永5年	1月3日	仙台城下に大火、焼失家屋1553戸	十三代慶邦	仙台城(二の丸時代)	1825 異国船打払令		
1804	文化元年	6月24日	雷火のため二の丸全焼				1867 徳川慶喜、大政奉還	
1809	文化6年	4月1日	二の丸完成					
1861	文久元年	9月18日	大地震					
1868	慶応4年	9月12日	仙台藩降伏、戊辰役終る					
1869	明治2年	6月17日	版籍奉還に伴い二の丸に勤政庁設置					
1871	明治4年	11月12日	東北鎮台を仙台城に移す(明治45年版仙台市史)			1871 廃藩置県		
1882	明治15年	9月7日	二の丸殿舎焼失					